

小中学生の学習環境：学校種と授業参加意識に注目して

報告者 センター教授

センター教務補佐（現千葉工業大学専任講師）

東京大学教育学研究科大学院博士課程

秋田 喜代美

市川 洋子

藤田 慶子

<問題>

PISA（2000, 2003）の結果では、日本においても学校間格差が拡大していることが指摘されている。この点について、荻谷・志水らによる調査（2002）において地域的あるいは家庭的な要因に由来すると考えられる学力格差を学校の力でかなりの程度克服している学校とそうでない学校という学校間格差の存在が指摘されている。つまり、生徒にとっての学習環境である家庭や地域という要因を学校の教育機能が克服する可能性と助長する危険性があることを示している。

また近年小中連携や接続の必要性がいわれるように、小学校と中学校という学校種間には子どもの発達と言う側面だけではなくそれを取りまく環境や意識においても小中学校種間での差があると考えられる。

そこで本調査では学力の形成規程因となる学習環境について、その学校種間差、学校間差を検討するべく、教師、親、小中学校に通学する児童生徒への調査を実施した。

なお、本稿ではそのうち、児童、生徒に関わる内容について一部要約を紹介するので展望全体については本研究全体の報告書を参照されたい。

<方法>

K市小学校18校、中学校9校、T市小学校5校、中学校3校 計 児童生徒4103名、保護者3689名、教師765名

質問紙調査。具体的には、1) 家庭での過ごし方、2) 親の関わりに対する認知、3) 授業参加意識、4) 授業雰囲気認知、5) 学習動機、6) 学習スタイルについてたずねている。

なお、ここでは1. 小学生と中学生の意識の違いと、2. 生徒の授業参加意識の高い学校と低い学校での生徒や保護者、教師の意識の差異、3. 男女別授業参加度の相違と教師の授業方法や教育観を検討した結果の概要を報告する。

<結果と考察>

1. 小学校と中学校の学習環境と行動の相違

K市とT市の両市に共通にみられた結果をここでは

とりあげる。

1) 家での過ごし方

勉強時間は、小学校に比べ中学校で増加する（K市小学校平均87.12分→中学校平均100.06分；T市小学校平均59.96分→中学校平均94.87分）。反対に、ゲームに費やす時間は減少する（K市小学校平均76.01分→中学校平均69.24分；T市小学校平均77.59分→中学校59.72分）。

2) 親の関わりに対する認知

すべての項目において、小学校と比較して中学校では関わりが減少していると認知されていた（生活・マナー K市小学校平均3.23→中学校3.02；T市小学校2.98→中学校2.70、学校外活動 K市小学校平均2.38→中学校2.13；T市小学校2.33→中学校2.14、勉強 K市小学校平均2.81→中学校2.31；T市小学校2.85→中学校2.27、体験活動 K市小学校平均2.22→中学校1.69；T市小学校平均2.43→中学校1.85、コミュニケーション K市小学校2.25→中学校1.93；T市小学校平均2.37→中学校2.15）。

3) 授業参加

中学生になると、発言したり質問したりするといった能動的参加は減少していた（K市小学校平均2.51→中学校2.38；T市小学校2.48→中学校2.24）。ただしノートを取ったり人の意見を聞くといった受動的参加は各市によって小中の値の相違は異なっていた。

4) 授業雰囲気

小学校と比較して中学校では、「授業不参加感」と「競争意識」が増加し（K市小学校 平均3.22→中学校3.32；T市小学校平均3.02→中学校3.40；K市小学校平均2.97→中学校3.36；T市小学校平均2.78→中学校3.46）、「授業参加感」「居場所感」が減少する（K市小学校平均2.89→中学校2.51；T市小学校3.06→中学校2.40；K市小学校平均3.56→中学校3.42；T市小学校平均3.65→中学校3.41）。

5) 学習動機

学習動機のなかでも学習そのものを楽しみを感じる「充実志向」、頭の訓練になるといった「訓練志向」、将

来の仕事や生活に役立つといった「実用志向」の3つは、中学校にあがると低下している（「充実志向」K市小学校平均3.45→中学校3.05；T市小学校平均3.56→中学校2.90；「訓練志向」K市小学校3.14→中学校2.70；T市小学校平均3.24→中学校2.63；「実用志向」K市小学校平均3.55→中学校3.28；T市小学校平均3.74→中学校3.28）。

6) 学習スタイル

「意味理解志向」，「思考過程重視」の2つが，中学生になると低下する（「意味理解志向」K市小学校平均3.22→中学校3.14；T市小学校平均3.27→中学校2.95；「思考過程重視」K市小学校平均3.55→中学校3.38；T市小学校平均3.61→中学校3.18）。

7) まとめ

小学生と比較した結果，中学生では生徒の勉強時間は増加するものの，そのやり方は，理解よりも暗記を重視し，答えを出すための道筋を吟味もまたしなくなっていく。加えて，学び自体に面白みを感じられなくなり，将来の仕事につながっていく作業と感じられなくなっていく。

また，授業も，中学校では，安心して参加できる場ではなく，友達同士が競い合い，授業に参加している度合いも低下していると感じられるものになっていく。そのような授業雰囲気の中で，中学生は発言したり質問するといった学習行動を低下させていくといったことを今回の調査結果は示唆している。

2. 授業参加意識の高い学校の特徴

1の結果からもわかるように，中学生は小学生に比べて，発言したり質問するといった能動的参加が減少していた。しかし，すべての学校においてそのような結果が得られたわけではない。学校によっては，中学校でも，授業の中で生徒たちが積極的に発言したり質問をしたりする学校も存在する。反対に，小学校でも生徒たちの授業参加が消極的な学校も存在する。

そこで，小中学校別に，積極的な授業参加が行われている学校とあまり行われていなかった学校とを選び出し，生徒，保護者，教師の意識の違いについて検討した。

1) 授業参加意識が高い学校，低い学校の選択方法

本調査では，授業参加意識として，発言したり質問をするといった「能動的参加」とノートをとったり話を聞くといった「受動的参加」の両尺度を測定した。それらの間には正の相関関係がみられた（ $r=0.40$ ， $p<.01$ ）。授業参加においては受動的参加も大事であると考えられることから，今回は，「能動的参加」「受動的参加」の両

者が高い学校を授業参加意識高群，低い学校を低群とした。

具体的な選択方法としては，各学校の能動的参加，受動的参加の平均値がともに平均値+標準偏差の二分の一以上の学校を授業参加意識高群，反対に平均値-標準偏差の二分の一以下の学校を授業参加意識低群とした。そして学校規模がほぼ同じになるように分析で対象校を選択した。その結果，小学校は，4件法で能動的参加が2.54以上，受動的参加が2.75以上の高群3校（生徒数98人，62人，50人），能動的参加が2.45以下で受動的参加が2.62以下の低群3校（生徒数72人，65人，90人）を選択した。中学校では能動的参加2.41以上，受動的参加2.76以上の高群2校（生徒数150人，312人），能動的参加が2.31以下，受動的参加が2.67以下の低群2校（生徒数183人，137人）にしぼって分析を行った。

高群，低群で有意な違いがあるかどうかを調べるため，T検定をおこなった。小学校では，高群の能動的参加の平均は2.57（SD=0.44），受動的参加の平均は2.75（SD=0.39），低群の能動的参加の平均は2.31（SD=0.46），受動的参加の平均は2.52（SD=0.48）であった。T検定結果から，有意な違いがみられた（能動的参加 $t(434) = -5.56$ ， $p<.01$ ；受動的参加 $t(434) = -4.76$ ， $p<.01$ ）。同様に中学校では，高群の能動的参加の平均は2.39（SD=0.42），受動的参加の平均は2.74（SD=0.41），低群の能動的参加の平均は2.24（SD=0.47），受動的参加の平均は2.59（SD=0.46）であった。T検定結果からも，有意な違いがみられた（能動的参加 $t(780) = -3.79$ ， $p<.01$ ；受動的参加 $t(780) = -4.03$ ， $p<.01$ ）。

2) 授業参加意識の高い小学校の生徒・保護者・教師の意識の特徴

高群と低群の各変数の平均と標準偏差をまとめた結果，親の関わりについては，一緒に夕食をとる，食事のマナーを教えてくれるといった「生活・マナー」が高群において高く認知されていた。授業の雰囲気については，「授業参加」と「居場所感」が高群で高く，「授業不参加」が低群で高かった。学習動機では，学習そのものを楽しみを感じて勉強をするといった「充実志向」が高群で高く，反対に勉強そのものは他の目標の手段となる「関係志向」「自尊志向」「報酬志向」が低群で高かった。また学習スタイルは，「方略志向」「意味理解志向」「思考過程重視」が高群で高かった。

教師たちの意識には違いがみられなかった。そのため，項目別に検討したところ，「教師の指導力不足を感じる」「総合学習は教師の力量の差がでる」といった項目において，低群の教師たちの意識が高い結果がみられた。

保護者たちの意識においては、学校への「肯定的評価」と「主要外科目」に対する満足度が高群で高い結果がえられた。

以上をまとめると、授業参加意識の高い学校では小学校の中で、授業の中で子どもたちがよく発言し、よく聞いている学校の生徒たちは、知ることの喜びやわからないことをそのままにしておきたくないといった知的好奇心を持って学習に取り組んでいる。そして、単に答えを出すことよりも、深く理解し、考え方を重視し、工夫して問題を解こうと試みている。授業の雰囲気をもて、周囲の子どもたちも熱心に参加していると感じ、発言を受けとめてくれそうだという安心感もある。そして、家に帰れば、夕食を親と一緒にし、食事のマナーについても教えてもらっているという感覚も持っている。

教師たちは自分たちの指導力不足を低群ほどには感じておらず、総合学習を教えるにあたっては教師の力量だけにその成否を帰属していない。

保護者たちは、学校に対しても「肯定的評価」を持っており、「主要外科目」についても満足している。

3) 授業参加意識が高い中学校における生徒・保護者・教師の意識の特徴

2) の分析と同様に、中学校においても授業参加意識の高い学校と低い学校との違いを検討した。

まず、保護者の関わりについては、参考書や読書用の本を買ってもらったり一緒に美術館にいたりする「学校外活動」、勉強でわからないところを教えてもらったり、励まされたり、ゲームやテレビの時間を制限されるといった「勉強」について、高群の生徒たちの方が多いと感じていた。

授業において、高群の生徒たちは、「授業不参加」「競争」的な雰囲気は低く、「授業参加」「居場所感」は高く認知していた。また、学習動機については、「充実志向」「訓練志向」「実用志向」が高く、「報酬志向」は低かった。また学習スタイルは、「意味理解志向」「思考過程重視」において高かった。

教師たちは、学力形成のための「体型・練習型授業」の必要性や、「子ども・保護者の最近の問題」は低く、総合学習への「可能性」については高く認識していた。

保護者たちは、高群の学校に所属している親は低群の親よりも、子どもとの「学校外活動」が多く、学校への「肯定的評価」も高く、「少人数・規模縮小」を希望していた。また子どもに対しては成績よりも勉強を楽しんでもらいたいという「ほどほど」の意識は低かった。

以上の結果をまとめると、中学校における授業参加意識の高い学校は低い学校と比較すると、生徒たちは学習

すること自体に楽しみを感じ、将来の仕事や生活に学習が役立ち、頭の訓練のために学習が役立つなど、多くの意義を強く感じていた。そして、問題を解くときにも答えを出すことよりも、深く理解しようとしたり、考え方を大事にしていた。そして授業という場で安心しつつ、あまり競争意識は高くないが、他の生徒たちも熱心に参加していると感じていた。

教師たちは、学力形成のために、教科書どおりに教えることや、反復練習の必要性をあまり高く感じておらず、子どもたちの努力や保護者たちの協力を高く感じていた。さらに、総合学習についてはその可能性を高く評価していた。

保護者たちは、生徒も認知しているように、学校外活動でも子どもと関わっていると高く捉えており、学校に対しても肯定的評価が高かった。また少人数指導や教師数の増加を望んでいる様子が見られた。

3. 男女別参加度に相違がみられる学校・見られない学校の違い

教育におけるジェンダーの問題は、児童・生徒へのジェンダー形成装置として機能しうる小中学校にとって重要である。中でも学級内のジェンダーを問うことは、多様な考えや生活背景を持つ児童・生徒がともに学べる多声的な学級をつくる上で有意義であると考えられる。ジェンダーに焦点化した研究は数多くあり、学習行動との関連では、近年では例えば「学習レリバンス」のジェンダー差を検討した研究がある(本田, 2004)。そこでは、「学習レリバンス」として、子ども自身にとっての「面白さ(現在のレリバンス)」や「役立ち感(将来的レリバンス)」に焦点化し、主に家庭環境及び教育達成との関連で分析されている。しかし、学級雰囲気に対する子どもの認知や保護者・教師の意識との関連は検討されていない。そこで本研究では、授業への参加の仕方を表す授業参加度のジェンダー差をもとに、子ども・保護者・教師の意識の特徴を検討することにした。

1) 授業参加度におけるジェンダーの相違

能動的参加と受動的参加についてジェンダーによる特徴を小中別・学校別に見た結果、小学校では能動的参加も受動的参加も女子の平均点が高い学校が多かった([男子平均点>女子平均点]の学校: 能動的参加…18校中6校, 受動的参加…18校中1校)。中学校では、受動的参加については小学校同様、女子の平均点が高い学校が多く、男子の方が高い学校は9校中2校であったが、能動的参加はほぼ半々であった([男子平均点>女子平均点]の学校: 9校中4校)。

2) ジェンダー差の大きい学校/小さい学校での相違

授業参加度について小学校の男女別平均点から、能動的参加・受動的参加の両平均点とも男女の差が大きい学校3校を男女差大群(N=272)、小さい学校3校を男女差小群(N=240)とし、2群間で学習行動や保護者・教師の意識などに相違があるかどうかをT検定により検討した。

その結果、有意な差のあった因子を見ると、男女差大群では、児童の回答のうち「授業中さわがしく落ち着かない」などの項目からなる「授業不参加」因子(差大群:3.25(0.83), 差小群:3.06(0.71),)と、自分のクラスは「成績を競い合っている」などの項目からなる「競争」因子(差大群:2.91(0.87), 差小群:2.78(0.92))が高く、保護者と教師がともに「ドリル学習を徹底する」などの「体系・練習型」授業を重視している傾向にあった(保護者:差大群2.63(0.44), 差小群2.56(0.42), 教師:差大群2.63(0.35), 差小群2.50(0.37))。

一方、男女差小群では、児童の回答のうち親による働きかけを表す5因子全てが有意に高く、「授業を楽しみにしている」などの項目からなる「授業参加」因子(差大群:2.77(0.75), 差小群:2.98(0.66))や、「安心して発言できる」などの項目からなる「居場所感」因子(差大群:3.43(0.84), 差小群:3.60(0.81))が有意に高かった。保護者の回答では、学校行事への参加程度を示す「学校参加協力」因子(差大群:2.65(0.63), 差小群:2.82(0.60))が有意に高く、教師の回答でも「子どもの家庭の背景の差に配慮して指導する必要がある」「この地域は学校に協力的である」などの項目からなる「保護者・地域」因子(差大群:2.85(0.31), 差小群:2.94(0.27))が有意に高かった。

以上の結果から、男子も女子も同じように授業に参加している学校(差小群)では、子どもは安心して楽しく授業に参加できており、保護者と教師がともに連携・協力を重視していることが分かる。従って、競争心をあおらず生徒が皆安心して参加できる授業を工夫することで、いたずらなジェンダー間勢力の形成を防ぎ、また、教師と保護者・地域がともに連携・協力することにより、学級雰囲気が良くなり学習を促進させる可能性も示唆される。

3) 能動的参加におけるジェンダーの相違

1) より、能動的参加については、小中学校ともほとんどの学校で女子が高いことが分かる。しかし、能動的参加については、小学校では1:2、中学校では半々の割合で男子が高い学校と女子が高い学校とに分かれている。そこで、能動的参加における男女別平均点から、男

女それぞれ値の大きい順に6校ずつ(中学は4校ずつ)を「女子高群(小学N=524, 中学N=373)」, 「男子高群(小学N=498, 中学N=570)」とし、子ども・保護者・教師の意識に違いがあるかを小中別に調べた。

その結果、子どもの回答から、小中学校ともに女子高群では「授業不参加」(女子高群:3.54(0.85), 男子高群:3.13(0.77))と「競争」(女子高群:3.42(0.84), 男子高群:3.32(0.83))の2因子、男子高群では「授業参加」(女子高群:2.34(0.71), 男子高群:2.69(0.72))と「居場所感」(女子高群:3.28(0.82), 男子高群:3.64(0.78))の2因子がそれぞれ有意に高かった。これらの因子は2)の結果と同じ組み合わせであり、小中学校ともに、男子の能動的参加が高い場合は、全体的に子どもは楽しく安心して授業に参加できる傾向にあることが伺える。逆に女子の能動的参加が高いと、競争意識が強くなり、授業中あまり落ち着かない可能性が示された。この結果は、小学校高学年で既にジェンダー間にある種の勢力差が形成されていることを示唆しており、2)と総合すると、ジェンダー差は小さい方が望ましいが、既にジェンダー差が形成されている場合は、男子の能動的参加が高い方が学級や授業の雰囲気は落ち着く傾向にあると考えられる。

<全体考察>

以上、本稿では学習行動と環境について、特に授業への参加という点についてとらえるならば、中学生では学習時間や意識だけではなく、授業が安心して参加できる場ではなくなくなってきており、友達同士が競い合っていると感じられたりすることによって、授業に参加している度合いも低下していると感じられるものになっていくこと、そして発言したり質問するといった学習行動を低下させていくといったことを示唆する結果が示された。

そして小学校、中学校のどちらにおいても、児童、生徒の授業参加意識が高い学校は低い学校に比べて、子どもたちは授業雰囲気を良好に認知し、学習動機も学習それ自体に楽しさを感じ、将来の仕事に対する結び付きも高く認識していること、また、学習スタイルも内容を深く理解し、プロセスを重視するものであることが示唆され、さらに教師たちの意識においても違いがみられた。そして生徒が授業に積極的に参加している学校の保護者ほど、学校に対する肯定的評価も高いという結果も得られている。

また授業の能動的参加のあり方にジェンダー要因が関与していることも本結果は示唆するものである。

今後実際の教室場面での観察事例や教師の意識と本研

究結果との関連を検討していくことが、本結果の数値や結果が示唆するものをより深く意味づけ考察していくために必要であると考えられる。

参考文献

- 荻谷剛彦・清水睦美・志水宏吉・諸田裕子 2002 『調査結果 「学力低下」の実態』 岩波ブックレット
国立教育政策研究所 2000 『生きるための知識と技能－OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2000年調査国際結果報告書（2000）』 ぎょうせい
国立教育政策研究所 2004 『生きるための知識と技能（2）OECD生徒の学習到達度調査（PISA）結果調査国際結果報告書（2003）』 ぎょうせい

謝辞・付記

本研究の実施にあたっては、K市、T市の教育研究センター、教育委員会ならびに学校にご協力をいただきました事を感謝御礼申し上げます。また本原稿は、秋田喜代美・恒吉僚子・村瀬公胤・市川洋子・藤田慶子での共同研究で実施した内容の一部を3名で執筆したものである。分析等にあたっては、杉澤武俊・飯田都両氏の協力を得た。両氏に感謝申し上げます。なお本論文は2005年日本心理学会で発表の原稿に加筆を行ったものである。